

保育者養成校に通う学生の 「感性」に関する認識

馬場 康宏 ・ 宮下 恭子 ・ 金城 悟
武石 仁美 ・ 杉本 亜鈴

1. 目的

幼稚園教育要領、及び保育所保育指針の領域「表現」では、子どもが豊かな感性をもつこと、をねらいの一つとして掲げている。この子どもの感性、に将来携わることになる、現在、保育者養成校に在籍している学生の感性を、教員がどのように育んでいくべきであろうか。教員自身が「感性」どのように捉え、保育者を養成する過程でどのように扱っていくべきかについての共通理解は、保育者養成校のカリキュラムや教授法を検討していく上でも重要な課題である。そこで本研究では、まず、学生が「感性」をどのように捉えているか、基礎的な調査によりその認識を把握することを目的とする。

2. 目的

保育者養成校系の短大に在籍する、295名（1年生170名、2年生125名）を対象として調査を実施した。使用した調査票は、今回作成したものであった。調査項目は、次の通りである。

①「感性」という言葉の使用頻度 ②一般的に感性とかかわりの深いと思う分野 ③自分の感性と関わりの深いと思う分野 ④自分の感性に最も影響を及ぼした人物 ⑤自分の感性に最も影響を受けた環境 ⑥自分の感性は豊かだと思うか ⑦各分野への興味関心の程度 ⑧「感性」からイメージする単語

3. 目的

(1) 調査項目と結果

調査項目とその結果について示す。

設問1として「『感性』という言葉をどの程度使用するか」について、4件法により評定を求めたところ、「あまり使わない」、「全く使わない」を合わせると236名であった。8割の学生は、「感性」という用語を日常生活において用いていないことが分かる。(図1参照)

設問2として「一般的に感性と関わりの深いと思う分野」について、15の選択肢を設定し、その中から3つを選択するように求めた。「音楽」を選択した者が249名(28.1%)と最も多く、以下、「美術」229名(25.9%)、「伝統文化」100名(11.3%)という順であった。

設問3として『自分の感性と関わりの深い分野』について、同様の選択肢から3つ挙げるように求めた。「音楽」が238名、「ファッション、メイク」が145名であり、自分のファッションやメイクに感性が関わっていることを意識している学生は、多いことが分かる。(図2参照)

設問4として、『あなたの感性に最も影響を及ぼした人物は誰でしょうか』という質問に、親、きょうだいなど7項目の中からひとつを選択するよう求めた。その結果「友達」が最も多く（104名）、次いで「親」（90名）であった。（図3参照）

設問5として『あなたの感性に最も影響を受けた環境』について一つを選択するよう求めた。この選択肢の中では「学校」の168名（57.3%）が最も多い。（図4参照）

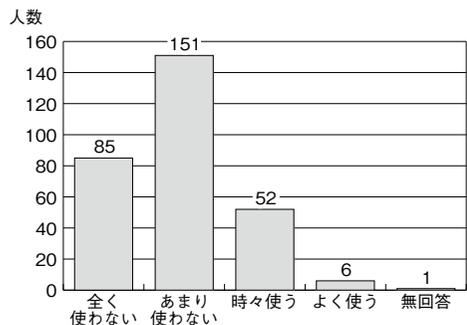


図1. 「感性」という言葉の使用頻度（設問1）

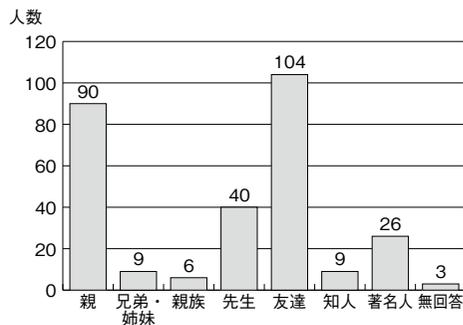


図3. 自分の感性に影響を与えた人物（設問4）

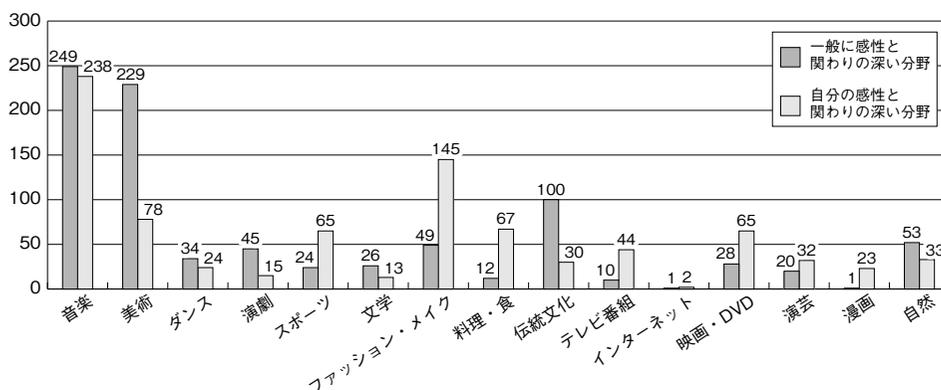


図2. 「一般的」に及び「自分」の感性と関わりの深い分（設問2、3）

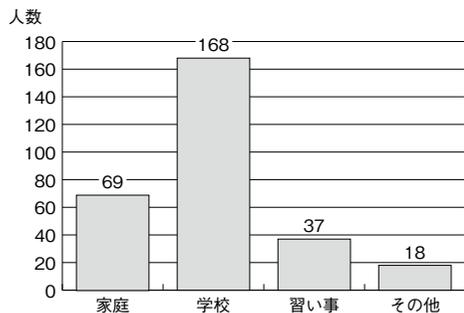


図4. 感性に影響を与えた環境（設問5）

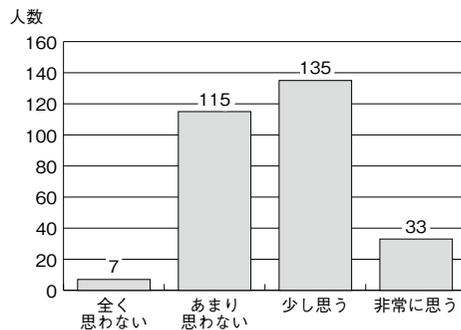


図5. 感性の豊かさ（設問6）

「その他」18名の内訳としては、舞台、ライブハウス、地域のボランティア活動、人のかかりなどの記述があった。

設問6として『自分の感性は豊かだと思うか』について、4件法による評定を求めた。約1割の学生が「非常に思う」(33名)と答え、「少し思う」は最も多く135名であった。(図5参照)

設問7として、設問2、及び設問3で用いた15の分野それぞれについて、どの程度興味や関心があるかを5件法により評定を求めたところ図6の結果を得た。

表1は、設問3『自分の感性と関わりの深い分野』について、選択肢から3つ挙げるように求めた結果を度数の高い分野順に、その右側には、設問7の「各分野に、どの程度興味や関心があるか」に対する回答を得点化し、平均得点の高い順に並べたものである。どちらも、「音楽」、「ファッション、メイク」が1位、2位になっているが、「美術」に関しては、順位付け上、差が大きい。

設問8では、「感性」からイメージする単語を3つ挙げる」よう求めた。挙げられた単語の内、30人以上が挙げた単語が3つあった。最も多かったのは「豊か」で37人、次が「音楽」で35人、3番目は「個性」で32人であった。

(2) 学年差

各設問に対して、学年による差異について検討したもののうち、学年差が認められた部分に注目する。

「感性」という言葉の使用頻度」について、学年差を検討するために、Wilcoxonの順位和検定を行った。その結果、有意差が認められた。「感性」という言葉の使用頻度は、2年生の方が1年生より有意 ($p<.01$) に高かった。(表2参照)

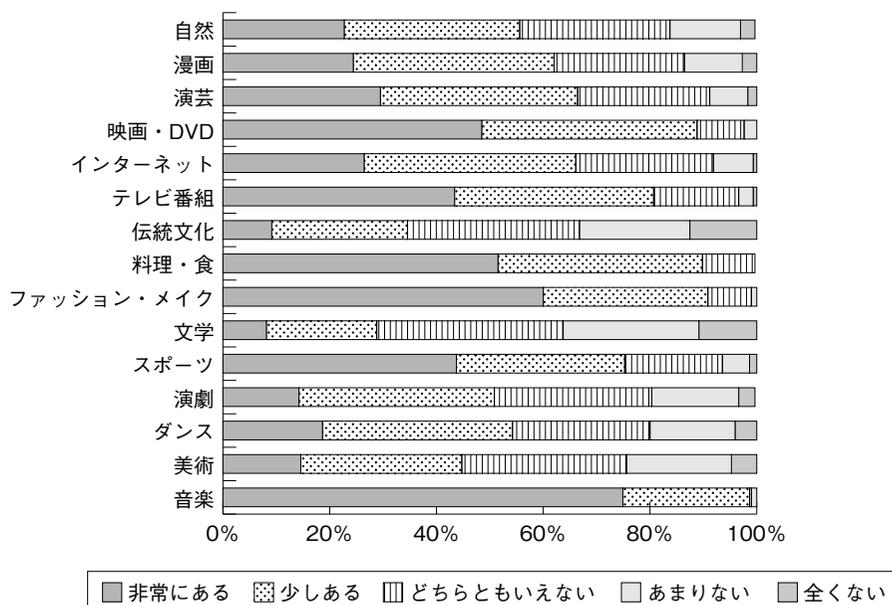


図6. 各分野への興味・関心の程度 (設問7)

表 1. 感性に関わる分野と興味関心の比較

設問 3	(度数)	設問 7	(平均)
音楽	238	音楽	4.73
ファッション・メイク	145	ファッション・メイク	4.50
美術	78	料理・食	4.42
料理・食	67	映画・DVD	4.34
スポーツ	65	テレビ番組	4.20
映画・DVD	65	スポーツ	4.11
テレビ番組	44	演芸	3.85
自然	33	インターネット	3.84
演芸	32	漫画	3.70
伝統文化	30	自然	3.60
ダンス	24	ダンス	3.49
漫画	23	演劇	3.43
演劇	15	美術	3.30
文学	13	伝統文化	2.98
インターネット	2	文学	2.90

設問 3 自分の感性と関わりの深い分野

設問 7 興味関心の程度

表 2. 「感性」という言葉の使用頻度 (学年差)

順位					検定統計量 ^(a)		
1. 「感性」使用頻度	学年	N	平均ランク	順位和		1. 「感性」使用頻度	
	1 年生	169	123.03	20792.50	Mann-Whitney の U Wilcoxon の W Z	6427.500	
	2 年生	125	180.58	22572.50		20792.500	
	合計	294				- 6.280	
						漸近有意確率 (両側)	0.000

a. グループ化変数：学年

表 3. 各分野への興味・関心の程度 (学年差)

		1 年生	2 年生
美術	N	170	125
	M	3.15	3.51
	SD	1.11	1.03
演劇	N	169	125
	M	3.28	3.62
	SD	1.03	0.98
スポーツ	N	170	125
	M	3.98	4.29
	SD	1.02	0.86
自然	N	170	124
	M	3.48	3.77
	SD	1.1	0.99

設問4の「感性に影響を受けた人物」、及び設問5「感性に影響を受けた環境」についてそれぞれ、カイ2乗検定を行ったが、学年による有意な差は認められなかった。

設問6の「感性は豊かだと思うか」について、Wilcoxonの順位和検定を行ったが、学年による有意な差は認められなかった。

設問7の各分野に対する興味・関心について、学年差を検討するため、分野ごとにt検定を行った。

その結果、「美術」($t(293) = 2.88, p < .01$)、「演劇」($t(292) = 2.85, p < .01$)、「スポーツ」($t(293) = 2.71, p < .01$)に関しては1%水準で、「自然(アウトドア、ガーデニング、散策など)」($t(292) = 2.33, p < .05$)に関しては5%水準で平均の差は有意であった。したがって、1年生より2年生の方が、これらの分野に対しての興味や関心は高いといえる。(表3参照)

4. 考察

「感性」という言葉の使用頻度については、図1で示したように、8割の学生は「あまり使わない」「まったく使わない」と答えており、学生の全体的傾向としては、使用頻度が高くない言葉であると考えられる。しかし、学年差を検討した結果、1年生よりは2年生の使用頻度が高いということが分かる。

さて、この「学年差」の意味であるが、既に養成校の中での教育経験、既に受けた授業数や、教育実習・保育実習への参加の有無などの点で1年生と2年生では大きな違いがあり、保育者養成校での経験の違いが反応の差として表れていると考えられる。

学校生活上の何らかの要因が、「感性」という言葉の使用頻度の差、これは、学生の行動レベルに対してであるが、影響を与えているのではないかと考えられる。

また、学生の内的な興味・関心の変化という観点からみても、今回の調査で設定した15の分野中、「美術」、「演劇」、「スポーツ」、「自然」について、2年生になると興味・関心の度合いが高まることが示唆されており、これは、関連する分野を扱う授業科目が、学生の興味・関心を高めることに影響しているのではないかと考えられる。しかし、具体的にどの科目のどのような要因がどのように作用しているかは、この段階では明確ではない。

図2に見られるように、学生は一般的には「音楽」や、「美術」、「伝統文化」のようなものと「感性」は深くかかわるのであろう…という認識はありながら、「自分の感性とのかかわり」という観点で挙げるのは「音楽」、「ファッション・メイク」といった、自身の身近なところに自分の感性を意識しており、質問の仕方によって「一般的に」と問うた場合と、自分自身の問題として捉えた場合では、その反応に違いが生じている。

図4から、「感性」というものは、「家庭」よりは「学校」からの影響を受けて形成されるものと認識する者が多いが、図3を見ると「学校」の中でも「先生」よりは「友達」の影響を受けるもの、また、「先生」よりも「親」の影響を受けるもの、という理解をしているものが多い。しかし、今回は選択式でひとつだけ挙げるように求めているため、人物間の影響力の差については、どのように認識されているかは不明である。

以上のように、学生にとって「感性」とは、言葉としてあまり使わない者が大部分で、「友達」や「親」の影響を強く受けるもの、「音楽」や「ファッション・メイク」と関わるなど、身近なところから影響を受け、そのかかわりがイメージされていることが分かる。

今回挙げた、15の分野のうち「美術」に注目する。図2に示されるように、「一般的」には

感性とかかわるもの、しかし、「自分の感性」との関わりについての意識がそれに比して低く、また、表1右欄に見られるように、興味・関心という観点からも、相対的に「美術」は、低めの順位に位置しており、「美術」に対する学生の「葛藤」のようなものが伺える。しかし、学年差に注目すると、1年生よりは2年生の方が、有意に興味・関心は高くなっており、この点に関しても「美術」に関連する授業科目が、学生の「感性」の理解について、何らかの影響を与えているのではないかと考えられ、その具体的な要因を今後探っていきたい。

また、先にも述べたが、1年生と2年生では、「感性」という言葉の使用頻度に差が見られ、さらに、内的な興味・関心も特定の分野で高まっていることが確認された。しかしながら、「感性は豊かだと思いか」について1、2年生の間に差異は認められなかった。

今回の調査では、以上のように「感性」というものについての学生の認識を大枠から捉え、その一端は示すことができた。しかし、今回用いた調査用紙は、学生の「感性」への認識を大枠で捉えようとしたものであったため精緻さには欠ける。今後は、焦点を絞るかたちで、さらに学生の「感性」に対する認識を探り今後の議論につなげたい。

【参考文献】

- 根津千佳子, 松本金矢 「教育実践における感性のフレームワーク」 2008 日本感性工学会論文誌 8 (1), 73-80.
- 日本学校音楽教育実践学会 「芸術（音楽と美術）教科に関する緊急シンポジウム～感性と心の教育に寄与する芸術（音楽・美術）教科の役割と方法を問い直す」 2006 学校音楽教育研究 10, 157-167.
- 小澤基弘 「教員養成大学・学部における絵画教育内容の構造化についての研究Ⅱ～大学教員へのアンケート結果の分析と考察～」 2008 埼玉大学紀要 57 (2), 1-15.
- 栗原泰子 「保育に関するテキストにおける幼児の表現のとらえ方について」 1999 川村学園女子大学研究紀要 10 (2), 151-162.
- 大岩みちの, 本山益子 他 「表現する者の養成のために～保育内容「表現」の授業への取り組みから～」 2005 岡崎女子短期大学研究紀要 39, 97-107

【付記】

本研究の一部は、日本保育学会第62回大会において発表されたものである。